

カンキツ黒点病情報第1号（ウンシュウミカン）

令和4年2月1日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

令和3年10月下旬の発生量が過去10年間で最も多い！
本病の越冬伝染源を減らすため、枯れ枝等の除去を徹底しましょう！

1 発生状況

令和3年10月下旬に行った巡回調査（ウンシュウミカン21ほ場調査）において、黒点病の発病果率は28.7%（平年9.7%、前年22.3%）で過去10年間と比較して最も高い状況です（図1）。

2 カンキツ黒点病について

本病は、果実、葉、枝に発生し、組織の表面に黒い小さな斑点が生じます（図2）。感染時の病原菌の密度が高い場合、果実では雨滴の流れた跡が発病して涙斑状となり、さらに進行すると果実一面に感染して泥塊状となります。

本病の伝染源は枯れ枝上の孢子であり、雨滴により孢子が果実や葉へ伝搬することで、感染が広がります。果実へ感染しやすい時期は梅雨期と秋雨期です。また、枯れ枝やせん定枝などの落ちている枝にも降雨により感染し、新たな伝染源となります。枯れ枝に本病原菌がまん延すると、菌は3年ほど生存して降雨のたびに孢子を出し、伝染源となります。

本病原菌は枯れ枝で越冬し、次作の第一次伝染源になります。これから、せん定作業をされる際は、特に本病が発生した場所を中心に枯れ枝の除去を徹底し、本病の越冬伝染源（第一次伝染源）を減らしましょう。

3 防除対策

- （1）伝染源となる枯れ枝を除去し、せん定枝は園内に放置せず適切に処分する。
- （2）前作に本病が発生し、老木など枯れ枝が発生しやすいところでは、こまめに観察し発生した枯れ枝を除去する。
- （3）雨に濡れた時間が長いほど感染リスクが高まるため、間伐や整枝、せん定を徹底しほ場内の通風を良くする。
- （4）梅雨期と秋雨期前期を基本に薬剤散布する。6月上旬頃から薬剤散布を行い、散布間隔は、散布後30日もしくは散布後からの積算降水量200～250mmを目安とする（マンゼブ剤およびマンネブ剤の場合。ただし使用回数に注意する。）。
なお、秋雨期の薬剤散布では収穫前日数に注意する。

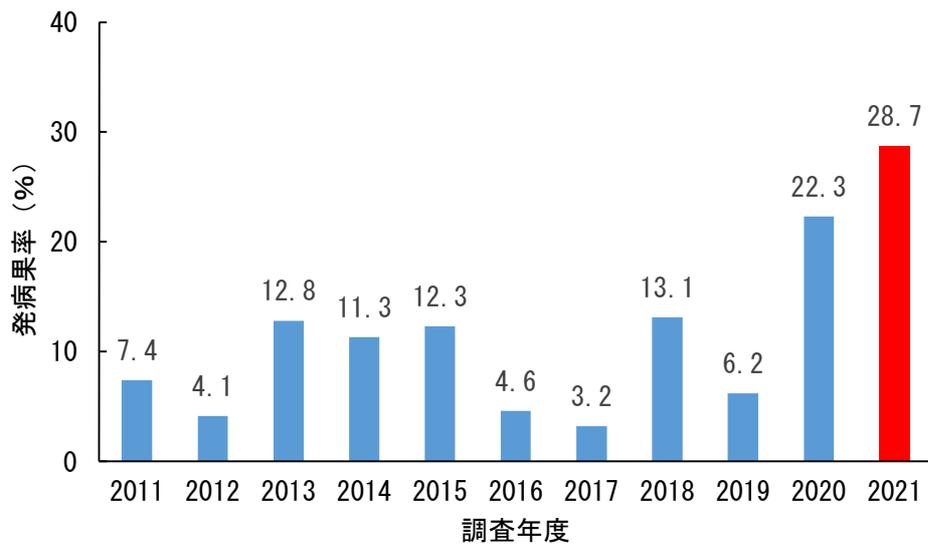


図1 近年の10月下旬の巡回調査におけるカンキツ黒点病発病果率



図2 カンキツ黒点病の被害果（黒点症状）